

---

# 草食男子も肉を食う

はぐれ会長

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

草食男子も肉を食う

### 【Zマーク】

Z6539Y

### 【作者名】

はぐれ会長

### 【あらすじ】

ゆるふわりんな草食系男子高校生『須藤 圭太（すどう 圭太）』が、ひょんなことから、入学早々個性的な美少女集まる生徒会に入れられてしまい、その中で翻弄されながらも、ゆるゆるえいえい頑張るラブコメディ。一話あたりがとっても短いので、プチプチくんを潰していくような感じで、暇なときに暇つぶしとして利用していただければ幸いです。

## 一 最大の危機

ぼくは平和がすきだ。

ドタバタした起伏のある日々は創作物の中だけで十分。何でもない毎日が続くのが、一番幸せだとぼくは思う。  
常日頃からそんなことだけを考えて過ごしたきたぼく  
圭太に、生涯最大の危機が訪れていた。

須藤  
すどう

なるたけ安全で平穏を……と、信号で青が点滅してたらもう横断歩道には踏み出さないぼく。

勿論今年から始まる高校生活の進学先だって、風紀が良くてのびのびとした校風のところを選んだ。

……だけど。

「校外で他校の不良さんに絡まれちゃ世話ないよねえ……。」

そう、ぼくは今他校の不良さんに絡まっていた。

今日は入学式なので、気の抜けた奴が多い という感じで待つていたのだろうか。

ぼくみたいな、いかにも草食さんな人が通るのを……。

「コラてめえ、何一人でぶつぶつ言つてやがる！」

ひいっ！

不良さんの恫喝にぼくは思わず身をすくめる。

あわわ、人生で初めての絡まれ体験。予想以上に怖いよ。

向こうはぼくより身長が高くて、一対一でもとても敵いそうになり。しかも三人に囲まれてる。

走つて逃げてもダメだろうなあ……。

声をあげても路地裏に引っ張り込まれたこの状況じゃ……。

要求通り財布を渡すしかないのかな？

ヤだなあ……今月入学祝いとかで親戚さんからお金とか貰つたば

かりでいつもより暖かいのに。

ええい仕方ない！ ぼくも男だ、覚悟を決めよう！  
相手も人間、ちゃんと言つたらわかつてくれるはず！

「あ、あのーです、ねー」

威勢よく言つたつもりが、ようよるとした小動物のような声。それに対し、

「ああ！？」

「ひいっ！」

不良さんは声が大きい、迫力もバツチリだ。  
うう、やつぱりダメだ……勝てっこない……。  
ぼくの中に住んでいる弱気なぼくと、強気じやないぼくが、二人とも諦めようと言つている。

全面降伏かあ……。

断腸の思いでカバンから財布を取り出そうとした、その時だった！

「待てい！ お前たちい！」

さつきの不良さんの声とも負けるとも決らぬ大きさの声で、凜とした一喝がぼくと不良さんの間に響いた。

良い声だなあ……なんて、ちょっと場違いなことを思つた。

声の主は女の子で、ぼくと不良さんたちに向かってすんずんと近づいてくる。

服装は……驚いたことに、ぼくと同じ学校の制服だつた。

それ以上に驚いたのは、その人が竹箒を構えて不良たちと相対したことだった。

「おいおい、讓ちゃん一人で俺らを倒すつもりかよ。しかもそんなもんで」

不良さんたちの言つとおりだと思つ。

でも今は、不良さんたちの注意が女の子に向いている内に逃げた方がいいんだろうか。

……いや、助けに来てくれた女の子を見捨てて逃げるなんて、男の子じゃない。

ぼくと女の子一人。勝てる見込みは全然ないけど、やるしかないんだろう。

う、後ろから不意打ちならちょっとぐらり隙は作れるはず。その間に女の子と一緒に逃げれば。

ぼくが今度こそ覚悟を決めて、不良さんたちの背中に向けて一步足を踏み込むと、

「安心するがいい少年よ、この三千劍せんせんつるぎいち 市が来たからにはこれ以上悪者共に好き勝手はさせぬ、我が正義の刃で、悪を貫く！」

天高く自らの得物を突き上げ、格好良くポーズを決めながら、ぼくに制止を促す女の子。

……構えているのが竹箒じゃなかつたら格好良かつただろうになあ。

不良さんたちは、女の子のアクションを見て苦笑している。そりゃー、そつかなとぼくは思う。

今時名乗りをあげて悪を討つ、なんて。ヒーローじゃないんだから。

でもぼくのその認識は、すぐに改められることになった。

彼女は 本当にヒーローみたいに強かつたのだ。

何が起こっているのかわからぬくらい強い。といふか、すごい。女の子は跳躍し、突き（竹箒で）、払い（竹箒で）、ばつたばつたと不良さんたちをなぎ倒していく。

その様はまるで剣舞でも舞っているようで、竹箒で戦っているのに、ぼくは思わず見惚れてしまった。

「大丈夫か、少年」

そう言葉をかけられ、ぼくはよつやくハツとして下を見下す。不良さんたちがのびていた。意識こそ失っていないけど、しばらくな動けなさそう。

「うわあ……。

ぼくは胸の内から熱いものがこみ上げてくるのを感じていた。

「ん? どうした、しううね わわつ!」

「ありがとう! もこますありがとう! もこます! ! ! !」

ぼくは思わず女の子に飛びついていた。

ぼくよりも少しだけ背丈が高い、上級生だろうか。

なんにせよ、この人はぼくを助けてくれたのだ。怖い不良さんたちから!

「い、いや、当然のことをしてまで礼には……って、な、何故泣いている! ?」

そう言われて、はじめて自分の視界がつむすりと潤んでいくことに気づく。

「! 」怖かったですし、嬉しかったですから……」

自分でも理由がいまいちわからなかつたので、説明もなんかあやふや。

でも怖かつたのも、助けてくれてすつじく嬉しかつたのも本当だ。

「つづり、よ、世の中には良い人もいるんですね……」

「あ、あの……感謝してくれるのは嬉しいのだが、そ、そろそろはなしてくれないか?」

女の子が身をよじりながら、少し頬を赤くして言う。  
「ん? どうしてだろう?」

ぼくは自分の状況を冷静に整理してみた。

ぼくは今ちょっと屈み氣味に女の子に抱きついている。で、女の子はぼくよりも背丈が高い。

必然的にぼくの頭は……? どこに埋められる……?  
むにむに。やわらかい。

「わ、わわわわわ! うわあつ! じめんなさい! ! !」

ぼくは脊髄反射で飛びのく。

助けてくれた女の子になんてことを……！

「『』『』めんなさー！ わざとじやないんです！ お詫びしますか

『』

「いや、い、いい。別に、その……わざとではないこと『』とは何となくわかるから」

焦つているぼくも真っ赤だらうが、女の子も少し恥ずかしそうにしている。

「とにかく、君が無事なら良かつた。私はこ、これで……」  
背を向ける女の手、なびいたポニーテールが、遅れて彼女の背中に、さらに遅れて、ぼくは彼女を呼び止めた。

どうして？ 助けてくれてなにかお返しがしたかったのは本当。でも、相手もいと言つているんだから、ことなれ主義のぼくとしては、このまま頭を下げて見送るのが普通なんじゃないだろうか。

でもどうしてか、気づいた時には口を動かしていた。

「待つて下さい！ 助けていただいたこともありますし、その、何かお返し出来ませんか？」

彼女は振り返る、少し困ったような顔だ。

ああ、やっぱり。ぼくは迷惑をかける。

でも自分の言葉を取り下げるたくない。田の前にいる綺麗な人と、もう少しだけ関わりを持ちたい。

ぼくにしては本当に珍しく、そんなことを思つてしまつた。

「ああ、そうだ」

ぼくのもやもやとした思考は、彼女の透き通るよひつな声でシャットアウトされる。

「見たところ少年　君はうちの学校の生徒だね？」

「あ、はい。そうです。今日入学式がありまして……」

とそこで、自分の言つたことから疑問が生まれる。

そうだ、今日は入学式だ。

目の前の人はどう見ても上級生、入学式は基本的に新入生以外休みなのでは……？

そんなぼくの疑問は、次の彼女の言葉で払拭されることになる。

「私に恩返しがしたいと思うなら　君、生徒会に入らないかい？」

生徒会……あなるほど、彼女は生徒会役員なのか。なら今日登校していてもおかしくは　って、

「え？」

新入初日のぼくが生徒会？

ぼくの平凡安全のんのん暮らしセンサーがウーウーと警告を鳴らしている。

ひょっとしてぼくは……たつた今、非常に面倒くさいことに巻き込まれたんじゃがないだろうか……。

## — 最大の危機（後書き）

初回なので長いです。

でも、以降はこれの四分の一ぐらいが続くと思います。

もつと小さいかも？

## 二 正義の生徒会

「あの、ほんとにぼく生徒会入り決定なんですかあ？」

「無論そうだ」

入学式から一田ほどお休みをはさんでの始業式。終礼が終わるや否や、新しい学校のみんなと交流をする間もなく、目の前を歩く女人に腕をつかまれ、現在進行形で誘導され中。

前を歩く女の子は、入学式の時にぼくを不良さんたちから護つてくれた、優しくて強くて、綺麗な人。

そういう意味では接点アリなんだけど、他には何にも知らない。

同じ学校の人で、生徒会に入ってるのかな？ つていうぐらい。

あの時は自己紹介もかわさずに颯爽と去つていっちゃつたし。だからぼくの名前もわからないはずだ。

それなのに……

「ぼくなんかに務まるんでしょうが、生徒会役員なんて」

「私に恩返しをしたいと言つたのは君の方じゃないか」

歩みは止めず、ずんずんとどこかへ向かいながら返事をする女子。行き先は聞いていないけど、予想がつかない方が変だと思つ。

「そ、それはそうですけど……」

「さあ、ついでぞ！」

女の子は一つの部屋の前で足を止める。

その部屋のプレートには『生徒会室』

……やっぱり。

「あ、あの、ぼくなんか何の役にも立たないかも知れませんよ、ホント。それでもいいんですか？」

自分から恩返しをしたいと言つておきながら、ちょっと情けないとは思うが、だつてまさか入学早々生徒会に入れられるなんて……。

「ああ、私は人を見る目には自信がある方なんだ。君なら大丈夫……だ……」

鷹揚に頷いていた女の子が、突如視点をある一点に定め、動かなくなる。

「……ど、どうしました？」

「…………。」

女の子は黙つたままだ。

ど、どうしたらいいんだろ？…………。

一体、視線の先に何が？

ぼくも女の子の向いている方向をたどりうとすると

「　おいそこのお前え！！　今廊下に何を捨てたあ！」

……女の子が視線の先に向かつて突進していった。

そこには新入生と思われる一人の男の子、足元にはパンの包装紙が落ちている。

多分に、ポイ捨てを行つたんだろ？と思つけど…………。

「神聖なる校内にゴミを捨てるとはなんたる不届き者！　この三千剣市が見逃すとでも思つたか！　我が正義の刃で、悪を貫く！！」

女の子がわけもわかつてない男の子の胸倉を掴みあげてガクガクとやつっている。

ぼくは、女の子が説教をして男の子が謝るまでの一部始終を呆然と見つめながら、ほんやりと思った。

……そのちょっと恥ずかしい口上、決め台詞だつたんですね……。

これは後からクラスの子に聞いた話だが、この学校の生徒会は、無駄に無意味に必要に風紀だけを正すことから、『正義の生徒会』とか言われているらしい。



## 二 正義の生徒会（後書き）

平均これぐらいの長さでやりたいですね。  
チチくん漬し小説を自称する身としては。  
ええ。

## 三 正義の生徒会長

「いやあ、恥ずかしいところを見せてしまったな」

「いえ……別に……はい……」

ポリポリと恥ずかしそうに頭をかいている女の子。

うーん……。今の見ていますこの生徒会に入るのが躊躇われてしまつたんだけど。

ぼくあんなこと出来ないよ？ 全然強くないし。平和に平穏にいこうよ。

「それじゃあ改めて、生徒会室に入ろうか

でもぼくのそんな心の中の葛藤なんておかまいなしで、女の子は扉を開いて、ぼくをぐいぐいと中へ引っ張る。

うつ、力……強い……。

ぼくの抵抗なんてあつてないようなもので、ほぼノーブレーキで引っ張られてしまう。

結果。

「うわああ

勢いよく引っ張られてぼくはそのまま体勢を崩し、前のめりに倒れてしまつ。

「いてて……」

ひざをぱしばしと払つて立ち上がると、そこには……生徒会室が広がっていた。いや、うん、当たり前なんだけね。他に何て形容したらいいかわからなくて。

部屋の中央に会議用の長テーブルがあつて、壁の隅には棚がギッシリ。ついでにその棚の中にもファイルがギッシリ。

会議で使うであろう、大きめのホワイトボードが置いてあつた。何故だかわからないけれど、『正々堂々と戦いぬけ！』と、書か

れている。……何の会議？

「ささ、座つてくれ」

ぼくの手を引っ張つた女の子は悪びれもせずにぼくを会議用机の椅子に座らせた。

女の子はぼくの対面へ座る。長方形のテーブルの、広い面にお互い座つてるので、距離が近い。端的に言つと、ちょっとびり恥ずかしい。

「さあ、まずは自己紹介から始めようか。この前はしつかつと出来なかつたからな！」

「はあ……」

相槌をうちながらぼくはチラリと横に田をやる。

女の子の隣に、誰か別の女の子が座つている。

気になる。

気になるけれど、まずは自己紹介した方がいいのかな？  
ぼくが自己紹介すれば、田の前の女の子も、その隣の女の子も続いてくれるだらうし……。

そしてはんなりとお断つするキッカケを見つければ……。

「え、えーと……」

全草食系男子ひとつで、自己紹介とは一ガテなものだと思つ。ぼくもそうだ。

それも今回は、クラスでの自己紹介より恥ずかしい。田の前に座る綺麗な女の子が、立ち上がり話し始めるぼくのことを興味深々で見上げている。

「須藤圭太です。一年じ組です。よろしくお願ひします」

……ん？ この場合よほじへつて言つやつたら自ら退路をふさぐことになつちゃう？

ぼくが座りながら田の過ちに気がつく、「じつじよつとかと考えてみると

ズバツ！ と、勢いよく田の前の女の子が立ち上がつた。

「一年A組、三千剣市！ 役職は生徒会長、嫌いなものは世には

さんせんつるぎ  
いち

びじる悪だ！ 私は、この手に正義をのせて、悪を貫く……」

ビシッと拳で天を衝く三千剣先輩。

頬も紅潮していて、その顔はどこか愉悦に歪んでいたように見え

た。

「…………（ジロリ）」

三千剣先輩がポーズを崩して、ぼくの方を期待した目で見つめてくる。

「いや……そんな目をされても。

「え、えと……かつ……いいですね」

とりあえず褒めてみた。

「えへへ、そつかなあ……」

ワシワシと頭をかきながら席に座る三千剣先輩。  
どうやら喜んでくれたらしい。

優しくて強くて綺麗な先輩は、変わった名前をしていて、それ以上に変わった性格の持ち主さんみたいだった。

### 三 正義の生徒会長（後書き）

市「好きな戦国大名は、浅井長政だ！」  
圭太「……ですか」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6539y/>

---

草食男子も肉を食う

2011年11月20日03時14分発行